

涙のつらさ



今日も路上でアンケート調査のバイト。ちなみに昨日も一昨日も。だいたい『幸せ満足度調査』って何だよ。質問の内容も意味不明なものが多すぎる。

『①・どんな時に幸せだと感じますか？』

『②・その時食べていたものは何ですか？』など：

幸せを感じているときに必ず何かを食べているという先入観はどんな教育を受ければ育つのだろうか。事実、この質問に即答出来た人はいない。皆一様に頭を悩ませる。アンケートよりも心理テストに近いかもしれない。もしこのアンケートにすらすらと答えられるような人がいるとすれば、俺はその人に心から拍手を贈りたい。

時給は千二百円となかなか良いが、朝の十時から夕方六時まで引きつり倒した笑顔で「アンケート調査にご協力お願いしますう：」

道行く人のほとんどは邪魔者を見るような目で、あるいは俺の存在すら認めないかのような素振りで通りすぎていく。午後三時すぎ。いつにも増して一段と低い空。今にも降り出しそうな雨。俺は雨が嫌いだ。

俺が立っているのはカフェの前の並木道で、すぐ横には洒落たベンチがある。三十分くらい前から人通りが減ってきた。立っていても辛いなのでベンチに座ってしまおう。

ベンチに座るとどうしてもカフェの店内が見える。一人で優雅に読書している人が目に入った。ガラス一枚隔てるだけで、ここまで差が出るかため息をつく。合図を待っていたかのように雨が降りだした。

傘は持ってない。星座占いは十二位に違いない。いや、むしろ一位だったら困る。この仕打ちで一位なら十二位の時のことなんて想像もしたくない。とりあえず、葉が多いとは言えない街路樹に雨宿りしよう。

とその時、薄いストライプ柄のブラウスを着たOL風の女性が二人、小走りで通り抜けた。「やだあー、下着透けちゃうー」

……今日の星座占いは三位くらいかもしれない。アンケートの①にだけは答えられる気がした。心理テストでなくて良かった。

二

僕はいつも決まってこのカフェでコーヒーを飲む。別に特別美味しいコーヒーを出すわけじゃない。でも、いつも決まってこの店だ。通っている大学の近くにも喫茶店はある。だけどやっぱりこの店だ。

その理由は一人の女性店員。偶然入った店でこんな出会いがあるなんて。その出会いから一ヶ月半。未だに声を掛けられずにいる。

少しでも彼女の顔が見たいので外に背を向け、店内を見渡せる席に座る。今日は昼過ぎからの雨の

せい、客は僕だけだ。思えば、雨の日にこの店に来るのは初めてだったかもしれない。

清潔感のある白いワイシャツに黒いエプロン。少し華奢な手でコーヒーを差し出す。その時の笑顔が僕の来店理由だ。明るい彼女は、マスターと思われる男性の下らない話にも笑顔で頷いている。

ずっと彼女を見ているのも怪しまれるので、いつも本を読んでいる。今日読んでいるのは、ずっと好きだった幼なじみが他の男との結婚してしまい、その結婚式で過去にタイムスリップする男の話。やり直したい、という気持ちはどんな人にもあるものなのだろうか。ドラマチックな展開になればなるほど、今の自分の現実が味気なく思えてしまうのが悲しい。彼女が店の入り口に向かい、その後店の奥に消えたので本を読むのに集中することにした。

どれくらいの時間が経っただろうか。気が付くと彼女が僕の横に立っていた。

「これ、よかったらどうぞ」木で編んだ底の浅いカゴに紙が敷いてあり、その上にクッキーが入れている。

「私が焼いたんですよ」「あ、ありがとう」

予期せぬ事態に慌てた僕はコーヒーカップを倒してしまった。その上あろうことか、こぼれたコーヒーが彼女のエプロンにかかってしまった。

「すみません、本当にすみません」「気にしないでください。黒だから目立たないし。それにちょうど洗濯しようかと思っていました」

ハンカチを差し出したが柔らかく断られた。彼女の優しさに自分の情けなさが一層際立つ。やり直したい、心からそう思った。

会計の時、クッキーが美味しかったことを付け加えてもう一度謝った。

「この近くにお住まいですか？」何のためらいもなく聞いてくる彼女にまた心が奪われる。

「大学が…この近くで…」ボソボソとしゃべる僕に彼女は続けた。

「もしかして赤点大学ですか？」「あっ、はい」「私もなんですよ！」さっき読んでいた本ほどではないにしろドラマチックな展開だと思った。

「友達と学食によくいるんで、見かけたら声掛けてくださいね」

会計を済ませて出口に向かうとき、一人の女性と入れ違いになった。店の入口には小さい黒板が掛けてある。入るときは無かった。カラフルなチョークで何か書いてある。女の子らしい可愛い字だった。

「雨の日は手焼きクッキーサービス♪」

やっぱり世の中そんなにうまくはいかないか。それでも心は来た時よりずっと晴れやかだった。

三

私は息を切らせながら地下鉄の改札を抜けて通りに出た。今日は週一回の休みだ。二ヶ月前に別れた彼に、もう一回会いたいとワガママを言って約束をした。もうすぐ約束の四時だ。家を出たときは何とか持ちこたえていた雨が降りだしていた。彼と迎えた最初の誕生日にプレゼントされた白いコートが濡れるのを避けるため、待ち合わせ場所はすぐ近くだったが折りたたみ傘を出した。そ

れなのに焦って傘を開いたときに、鞆の金属部分に引っかかり傘の布地が破けてしまった。しかたなく私は待ち合わせの喫茶店まで走ることにした。

待ち合わせの店に入るとき、優しい表情の男性が「どうぞ」とハンカチを差し出してくれたので、申し訳なく思いながらもその厚意を受けることにした。お礼を言いハンカチを返そうとするとその男性は「また濡れるかもしれないし、よかったらどうぞ」と立ち去ってしまった。

店に入って携帯電話の時計を見ると、何とか四時に間に合った。彼はまだ着いていないようだ。奥の二人掛けの席を選び、コートを壁に掛ける。彼が着くまで色々なことを頭にめぐらせていた。別れてからの二ヶ月、他の男性からの誘いが無かったわけじゃない。どうしてもと言われ、食事デートに行った相手もいた。それでも、私の視線はいるはずもない彼の影を追ってしまっていた。別れてから初めてのメールは私が送った。

「元気？」それだけだった。何を言えばいいのか、聞けばいいのか、分からなかった。「うん、まあ。」返ってきたのもそれだけだった。それから昨日まで、何の連絡も取らなかった。

いつの間にか当たり前になってしまう。そんなことは自分たちには関係ない話だと思っていたのに。何気ない瞬間のことでも、思い出すだけで外の景色が滲んできた。

こんなことではいけない。自分に言い聞かせ大きく深呼吸をしたとき、店のドアが開いた。久しぶりだが見慣れた横顔。少し痩せた気もする。店内を見渡し私を見つけると一呼吸おいてからこちらに向かって歩いてきた。

「ごめん、待った？」「ううん……」何も注文してないの？すいません、ホット一つと……」彼が私を見る。

「私も同じので」注文を済ますと、少しの沈黙があって、私から口を開いた。

「ごめんね、急に」「うん。別に大丈夫だよ」三歳年上の彼は、私よりずっと落ち着いているように見えた。出来るだけ冷静に、彼の目を見て言った。

「少し痩せた？最近どうしてた？」「痩せたかな？特に何も無いけど…お前は？」

ああ、そうだ。私のことを「お前」と呼ぶのは彼だけだった。息を飲んで、緩みそうになる涙腺に力を込める。「うん。友達と会う回数が少し増えたかも…」

店員の女性がホットコーヒーを二つ持ってきた。彼は私に自分の分のミルクを渡してくる。付き合っていた頃、彼はブラック、私はミルクを二つ入れるのが習慣だった。こんな些細なことにでも今の私は胸を締め付けられる。

でも、いつまでこうしてはいられない。コーヒーの色がミルクと混ざり合って変わるのを見届け、思い切って言うことにした。

「もう一度やり直したいの…」

彼は返事をせずに、別れてから今日までのことを話し始めた。私のことで頭が一杯になり仕事が手に付かなかったこと。携帯電話が鳴ると思わず期待してしまったこと。

耐えに耐えていた涙が、少しグレーがかってこぼれた。嬉しくて抱きつきたいなんて、もう何年も忘れていた感情だった。

少し話が落ち着いたところで、さっきの店員さんがクッキーをサービスしてくれた。いろんな形のクッキーの一番上に、赤いハート型のジャムクッキーがあった。

「一緒に食べようか」

彼の言葉に笑顔がまた滲んでいく。さっきの男性は間違っていないなかったようだ。私は譲り受けたハシカチで涙を拭いた。

店を出ると、私たちにアンケート調査の協力を求める男性がいた。詳しい質問の内容は覚えていないけれど、答えは覚えている。

『彼といるとき』

そして

『ジャムクッキー』

もしかしたら私達を祝福してくれる誰かがいたのかもしれない。歩き出した私たちの後ろから雨音に混じってパチパチと拍手が聞こえた、ような気がした。

四

私は、とあるカフェでアルバイトしている大学生。色々なお客さんがこの店に来る。

このカフェの名前は「strawberry fields」由来は詳しく知らないけど、マスターが好きなバンドの曲名から取ったみたい。

私はこのアルバイトにやりがいを感じている。日々の喧騒の中でどれだけお客さんを癒せるか。小さいことかもしれないけど、たまに言ってもらえる「ありがとう」が何より嬉しい。

今日はあいにくの曇り空。すぐにでも雨が降り出しそう。こんな日は、決まってお客さんが少ない。

そうそう、うちのカフェは雨の日に「手焼きクッキーサービス」をしてるの。もちろん私が心を込めて焼いている。今のところ、お客さんは一人だけだけど…。

店の前の歩道で、首からバインダーを下げてアンケート調査らしきことをしてる男性がいる。マスターによれば、ずっと朝からいるみたい。昨日も一昨日もだって。私は心のなかで「頑張ってる」とつぶやいた。

そうこうしてるうちに、雨が降ってきた。さっき仕込んでおいたクッキーの生地をオーブンに入れる。そのあと入り口に「雨の日は手焼きクッキーサービス♪」の看板も出さなきゃ。

クッキーが焼きあがったから窓際の男性のお客さんにサービス。この人もいつも来てくれるお客さん。物静かで気品ある仕草がうちのカフェにマッチしてる。

マスターはさっきから昨日のテレビの話をしてる。あんまり興味はないけど、嬉しそうに話すからつつい聞いてっちゃう。

唯一のお客さんが会計にきた。聞いてみたら私と同じ大学。ビックリしちゃった。

「いらっしやいませ」

入れ違いで白いコートの女性が入ってきた。私のことが目に入ってないみたい。奥の席に座って、どこか悲しそうな顔をしてる。

きれいな人。

しばらくしたら、背の高い男性が入ってきた。あの女性と待ち合わせかな。オーダー取らなきゃ。

ホット二つか…

私の中で、ある法則があるの。

別れるカップルはアイスコーヒー。寄りを戻すカップルはホットコーヒー。

きれいな女性が、きれいな涙を流してる。サービスのクッキーを出そうとする私を、マスターが引き止めた。マスターは棚の奥の筒からハート型の赤いジャムクッキーを出して、一番上に添えた。やっぱりマスターは渋いなあ。

さて、その二人も見送っていいよいよお客さんがいなくなっちゃった。恋人たちの出逢いや別れを見てきたマスターは、普段はおちゃらけてるけど、心優しい。朝から頑張ってる歩道の彼にコーヒートクッキーを持っていくように言われた。

「お疲れ様です。これ、良かったらどうぞ。立ちっぱなしは大変ですよね」
その男性は一瞬驚いたあと、何度もお礼を言って、子犬みたいな可愛い顔でコーヒートに口をつけた。それが私と彼の出逢いでした……。

おしまい。